

刘利国 编

日本文学



北京大学出版社

1948年 版

日本文学



上海书店出版社

日 本 文 学

刘利国 编
陈 岩 审

北京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学/刘利国编著.-北京:北京大学出版社,19

97.3

ISBN 7-301-03304-4

I.日… II.刘… III.文学-概况-日本 IV. I313.09

书 名: 日本文学

著作责任者: 刘利国

责任编辑: 许耀明

标准书号: ISBN 7-301-03304-4/I.414

出版者: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

电 话: 出版部 62752015 发行部 62559712 编辑部 62752032

排 印 者: 北京市经纬印刷厂

发 行 者: 北京大学出版社

经 销 者: 新华书店

850×1168 毫米 32 开本 11.75 印张 270 千字

1996 年 11 月第一版 1997 年 3 月第一次印刷

印 数: 0001—5,000 册

定 价: 16.80 元

前 言

本教材是为日语专业学生编写的日本文学教材,并被指定为“辽宁省日语专业(本科)自学考试”文学课教材。

本教材是在“作为语言专业的文学教材”这一指导思想下编写的,因而更注意全貌、宏观。较之以往的教材,本书有以下几方面特点:一、选材时间跨度宽。书中所收既有古典文学作品,又有近、现代文学作品,时间跨度为1千几百年;二、文学样式全面。本书打破以往日本文学教材几乎只收小说的作法,广纳各种文学样式,收有散文、诗歌、小说、评论、和歌、俳句等;三、不出汉语注释。作为高层次的教材,本书所有解释一律不出汉语,目的是把思考留给学习者,使学习者在学习文学的同时提高语学能力,通过吃透词语捕捉作品的寓意。为方便学习者,本书每篇作品都附有作者介绍及词语注释,并对难读的词标注了假名。同时,为了扩大学生的阅读量,本书还选编了8篇阅读课文,供学生课外阅读。教师在授课时可以排除在外,不列入考试范围。阅读课文在目录上均做有△号标记,具体课目为第5、10、14、15、18、20、23、28课。

本书在编写过程中,得到了友好学校交换教师、日本北星学园大学教授田村信一、日本文教专家常国佳久先生的指导、帮助,北京大学出版社许耀明先生为本书付梓付出辛勤的劳动,在此一并致谢。

本书在选材、注释等方面恐有不当之处,诚望得到各方面的批评、指正。

编 者

1996年夏日

目 录

第 1 課	ひとすじの道	1
第 2 課	月 夜	9
第 3 課	砂漠への旅	16
第 4 課	友情について	24
第 5 課	△言葉の意味	30
第 6 課	美しい別れ	37
第 7 課	元日のこと	54
第 8 課	初秋海浜記	62
第 9 課	美を求める心	72
第 10 課	△日本の耳	81
第 11 課	鳥	97
第 12 課	たこになったお母さん	115
第 13 課	水 泥 棒	128
第 14 課	△海と毒薬	149
第 15 課	△いとしのブリジット・ホルダー	175
第 16 課	伊豆の踊り子	213
第 17 課	城の崎にて	234
第 18 課	△赤ままの花	243
第 19 課	こころ	255
第 20 課	△忘れえぬ人々	287
第 21 課	俳句	306
第 22 課	和歌	310
第 23 課	△紀行文——おくのほそ道(抄録)	328
第 24 課	竹取物語	347

第 25 課	平家物語	351
第 26 課	徒然草	354
第 27 課	方丈記	361
第 28 課	△枕草子	364

第1課 ひとすじの道

ひがしやまかい
東山魁夷

ひとすじの道が、私の心に在った。

夏の^{そうちよう}①早朝の、野の道である。

青森県^{たねさし}種差海岸の、牧場でのスケッチを見ている時、その道が浮んできたのである。

正面の丘に^{とうだい}灯台の見える牧場のスケッチ。その^{まく}柵や、^{ほうぼく}放牧の馬や、灯台をとり去って、道だけを描いてみたら——と思いついた時から、ひとすじの道の姿が心から離れなくなった。

道だけの構図で描けるものだろうかと不安であった。しかし、道の他に何も描き入れたくなかった。現実の道のある風景でなく、象徴の世界の道が描きたかった。したがって、どこの道を描くというわけではないのだが、いろいろな条件を考えると、やはり、種差牧場の道を手がかりにして構成するのが、まとまりがよさそうに思えるのだった。しかし、その牧場をスケッチしたのは戦前のことで、十数年も前のことである。はたして、あの道が、あのままの姿で、いまでも在るのだろうか。心細いことであった。

行っても無駄ではないか、何も、あの道にこだわることはないとも考えられた。昭和二十五年のことであるから、旅行事情もあまり良いとは云えない頃だったが、私の懸念は、そのことではなかった。最初の^と拠り^{どころ}処となった現実の風景が、すっかり変ってしまっていた場合、せつかく心の中に形成されかかっている道

の影が、薄れてしまうのではないかと心配であった。

それでも、どうしても行ってみたくなった。東北本線が水害で不通になっていた時なので、^{おうせん}②奥羽線で青森を廻って入戸^{はちのへ}に着いた。

種差海岸の牧場へ行くと、その道は荒れてはいるが、以前のまま牧場の中を通過して、灯台の丘へと、ゆるやかに続いていた。

「来てよかった」と、ひとりごとを云って、私はその場に立ちつくした。

海へ傾斜している芝の^{スロープ}③スロープの中に、その道は両側を雑草に^{ふちど}④ふちどられて、まっすぐに、ゆるやかに上ってゆき、やや、右へ曲ろうとして、視野から消えている。そして、遠く向うの丘を、その続きと思える一線が横切っているのが見える。

しかし、十数年前のスケッチから、私の心の中に浮び上ってきた道と、この現実の道は、かなりの隔りはあった。大づかみな構図としては、この丘と道との組合せでよいように思えたが、いま、目の前にある道は、夏の陽に^や灼かれ、土も草も乾いていた。道の土の持つ^{おちつき}落ち着きのある情感、両側の草と道との境の^{さい}細やかな味わい、そういうものが失われていた。向うの丘の^{スライ}⑤スライインも、以前はゆったりとした線であったが、いまはその頂きに岩が露出している。十年の風雪が洗い出したものであろうか。戦争の^{こうはい}荒廃の跡は、この、^{みちのく}⑥みちのくの果ての牧場の道にも、あらわれていると思えるのだった。

私は、しっかりと^{うるお}潤いのある道が描きたかった。事情を話して牧場へ泊めてもらい、朝早く、まだ陽の登らぬうちに、この道を写生した。^{いちかわ}⑦市川へ帰ってきてからも毎朝、近くの川の堤の道を歩いて、露に濡れた草むらや、土の色を見ては参考にした。こうして、「道」の制作の準備を進めていった。

道は、歩いて来た方を振り返ってみる時と、これから進んで行く方向に立ち向う場合がある。私はこれから歩いて行く方向の道を描きたいと思った。ゆるやかな登り坂に向った時、私達には、これから、そこを歩いて行くという感じが起る。それに反して下り坂を見おろすと、いままでたどって来た道を振り返った感じになり易い。

この道の作品を描いている時、これから歩いてゆく道と見ているうちに、時としては、いままでにたどって来た道として見ている場合もあった。絶望と希望とが織り交った道、遍歴の果てでもあり、新しく始まる道でもあった。未来への憧憬の道、また、過去への郷愁を誘う道にもなった。しかし、遠くの丘の上の空を少し明るくして、遠くの道が、やや、右上りに画面の外へ消えているようにすると、これから歩もうとする道という感じが強くなってくるのだった。

人生を道にたとえるのは平凡である。しかし芭蕉が、あの不朽の紀行文に「奥の細道」と題したのは、その文中に、奥の細道の山際に云々の文があるところから、現実の道の呼び名でもあり、奥州地方の細々とした道の意味からでもあろうが、辺鄙な地方の細々とした道をわけて旅行く自分の姿、芭蕉の人生観、芭蕉の芸術観の象徴として選んだ題名と云えるだろう。私も、いつも旅をし、旅を人生とも、芸術とも感じている人間であって、遍歴の象徴としての道は、かなり鮮明な映像となつて、心に深く刻みつけられている。

私もいろいろな道を歩いた。

早春の丘の道。あざやかな緑の縞模様を描く麦畑。まだ芽の出ない桑畑。遠くの嶺々には白い雪。⑤エメラルドの空に軽や

かな雲。

溪流に沿って、いくつもの寂しい山村を結び、杉木立の影を落す旧街道。石をのせた板葺き屋根。暗い部屋の中の蚕棚。椽の音。

ふな、みずならの林の奥へと、落葉を敷きつめた道がある。やわらかな足裏の感触。落葉を踏む音。そこ、ここに白樺の幹があざやかに立つ。林の奥に明るい楓の朱色。

雪国の道。踏み固められたところを、ひろって歩く。櫓が来る。すれちがいざまにわきへ寄ると、よろけて深い雪の中に踏みこんでしまう。若い女の頭巾の鮮やかさ。

軒下をきれいな水が流れる。古い小さな町。⑩連子窓の下に並べられた草花の鉢。壁のはがれ落ちた⑪土蔵に明るい⑫夕映え。暖簾。古風な看板。

都会の雨の舗道。飾り窓の華やかな灯りが⑬にじむ。地下室のバーから昇ってくるジャズの旋律。疲れた顔の人々。寂寞。

新しい美の字の徽章の学帽。うぐいすだにの駅から桜の花を踏んで、博物館のわきを通り学校へ通った道。

秋の夜。美術館の壁に貼り出された入選者発表。暗い中に人々のどよめき。初入選の喜びに、⑭宙に浮く足どりで坂下の郵便局へ、公園の道を走った——神戸の両親に電報を打つために。

城壁沿いに驢馬に乗った老人がやってくる。石橋の下で村の女達が布を棒で叩きながら洗濯をしている。白楊の並木が風にそよぐ。⑮熱河省承德の道。

ローマ郊外のアッピア街道。廢墟と糸杉と傘松。⑯パウロがキリストのまぼろしを見た道。夏の雲。遠い雷。

古い^{はふづく}破風造りの家並み。時計台のある都門の塔の上に、^⑩このとりの巢。広場の泉。馬車の蹄が夕闇^{いしだたみ}迫る石畳の道に火花を散らして通り過ぎる。^⑪バイエルンの古都。

召集令状を受けとり、品川^{しながわえき}駅から灯火管制下の暗い街を、区役所へ歩いて行った雨上りの道。

まだ熱い瓦礫^{がれき}と、切れ落ちた電線^{たお}、斃れた馬、黒い煙。日蝕^{にっしよく}のような太陽。空襲下の熊本市の道。

母の柩車^{きゆうしゃ}を曳いて行った^ひ荊沢^{ばらざわ}の道。風が強く新雪^{しんせつ}に輝く富士山が澄みきった空に浮んでいた――

道の思い出は尽きない。これからも、どんな道をたどることか。^⑫シューベルトの歌曲集「冬の旅」は^⑬ミュラーの詩によるものだが、全篇冬の道をたどる旅人の孤独な姿を描いて、人生の^{せきりよう}寂寥^{せきりよう}を歌っている。有名な「菩提樹^{ぼだいじゆ}」の歌も、この一連の詩、^{ひようはく}漂泊^{ひようはく}の冬の旅のさ中^{なかに}あって、都門のそばの泉に立つ菩提樹の葉^はかげに、心の^{やす}休^{やす}らう場^ばがあったことを回想する郷愁の歌である。また、「道しるべ」は、^{こうや}曠野^{こうや}をさまよう旅人が道しるべを見出すが、それは何人も再び還ることのない道を示している。最後に旅人は「宿」に来る。^{はかば}墓場^{はかば}である。宿のしるしは、^{とむら}葬^{とむら}いの青い花であり、その冷たい臥床^{ふしど}に疲れた身を休めようとする。しかし、宿の^⑭あるじに拒絶されて、ふたたびさまよって行く。この道は絶望の果ての冬の道である。私は冬の道を経て、ようやく、初夏の朝露を含んだ草原の道に立ち向おうとしている。

「道」をその年の秋、第六回^⑮日展^{にってん}へ出品^{しゅっぴん}した。豎長の画面の、ほぼ中央に、やや、ピンク色がかったグレーの道、左右の^{くさむら}叢^{くさむら}や丘は青緑色、空は狭くとり、青味がかったグレーにした。

この三つの色の分量の対比を考えた。出品作としては、ずいぶん小さい画面であるが、これ以上大きくすると画面の緊密感がうすれると思った。小さ目の画面を充実させることが、この絵の場合、必要であると考えた。

こつこつと積み上げるような丹念な描き方で仕上げて行った。

この年、はじめて日展の審査員になり、この「道」の出品作は多くの人々の共感を得て、画壇的にも世間的にも認められるようになった。

人生の旅の中には、いくつかの岐路^{きろ}があり、私自身の意志よりも、もっと大きな他力に動かされていると、私はこの本のはじめの章に書いている。その考え方はいまも変わらないが、私の心の中に、このひとすじの道を歩こうという意志的なものが育ってきて、この作品になったのではないだろうか。いわば私の心の^す据え方、その方向というものが、かなり、はっきりと定まってきた気がする。しかし、やはりその道は、明るい^{はげ}烈しい陽に照らされた道でも、陰惨^{いんさん}な暗い影に包まれた道でもなく、早朝の^{はくめい}薄明の中に静かに息づき、坦々として、在るがままに在る、ひとすじの道であった。

【作者紹介】^{ひがしやまかい}東山魁夷(1908～)。日本画家、随筆家。横浜市生まれ。本名新吉。東京美術学校日本画科に在学中、二回帝展に出品し、1931年同校を卒業。1933年～35年渡欧し、第一回日独交換留学生としてベルリン大学哲学部美術史料に学ぶ。帰国後、官展を中心に活躍。つねに風景画にとりくみ、純度の高い澄んだ近代画境を追求している。日本芸術院会員。1969年文化勲章受章。代表作「残照」「道」「朝明けの潮」ほか。随筆に「わが遍歴の山河」「風景との対話」などがある。

【語釈】

- ①早朝/朝早いころ。早晩^{そうぎょう}。明け方。
- ②奥羽線/奥羽本線。東北地方の裏日本側を縦貫する国鉄線〔現在はJR線〕。福島・秋田・青森を結ぶ。長さ487キロメートル。
- ③スロープ/傾斜。斜面。
- ④ふちどる/物のふちに細工をほどこす。ふちに色のちがう線を引いたりひも状のものをつけたりする。ふちをつける。
- ⑤スカイライン/空を背景として見た時の山、建物などの輪郭線^{りんかくせん}。
- ⑥みちのく/《名》「みち(道)のおく(奥)」の約。もと、今の東北地方(奥羽地方)全体をばくぜん^{ばくぜん}とさした。
- ⑦市川/千葉県西端^{せいたん}の市。東京の東に隣接する衛星都市。
- ⑧エメラルド/あざやかな緑色をした緑柱玉^{りよくちゆうぎよく}。緑玉石^{りよくぎよくせき}。
- ⑨連子窓/れんじをとりつけ(内側に障子などをはめ)た窓。「連子」は、窓・欄間^{らんま}などに、たてまたは横に一定の間隔をおいてとりつけた棧^{さん}。
- ⑩土蔵/壁を土やしっくい^{しっくい}で厚くぬりかためた、くら。つちぐらとも読む。
- ⑪夕映え/夕日の光で、空などが赤く照りかがやくこと。夕焼け。
- ⑫にじむ/物の輪郭がぼやけて広がる。
- ⑬宙に浮く/地に立たずに空間にうかぶ。
- ⑭パウロ/キリスト教をローマ帝国に普及するのに最も功の多かった伝道者。もと熱心なユダヤ教信者であったが、復活したキリストに接したと信じて回心し、生涯を伝道に献げ、64年頃ローマで殉教^{じゆんきやう}。
- ⑮破風造り/日本建築の屋根の造りの一つ。屋根の端につけた山形の板。
- ⑯こうのとり/こうのとり科の鳥。羽毛は大部分白色、羽は黒色で、足が赤い。巢は木の上に作り、かえる・魚などを食べる。
- ⑰バイエルン/ドイツ南部の州。農耕・牧畜・鉱業が盛んで、ビール醸造^{じやうぞう}は世界的である。
- ⑱シューベルト/(1797~1828)オーストリアの作曲家。豊富な旋律による抒情味と簡素な優美さとで知られる。歌曲集「美しき水車小屋の娘」

「白鳥の歌」「冬の旅」をはじめ、600余の^{しゆぎよく}珠玉のような歌曲の外、
^{こうきようきよく}交響曲・^{しつないがく}室内楽などを作曲。

⑱ ミュラー/(1794～1827)ドイツ後期ロマン派の詩人。シューベルトの
「美しき水車小屋の娘」などの作詞者。

⑳ 休らう/休む。休憩する。

㉑ あるじ/主人。所有者。

㉒ 日展/美術団体の一つ。また、その主催する総合美術展覧会。毎年秋季
に展覧会を開催。

㉓ 据え方/置き方。

㉔ 薄明/[明け方・夕方の]うすぼんやりとした明るさ。

第2課 月夜

せとうちはるみ
瀬戸内晴美

今年の^{ちゆうしゆう}中秋の名月は、^{さが}①嵯峨では雲ひとつなく、^{まばゆく}②まばゆく輝き、澄みきっていた。

一年なじんだお手伝いの少女が、明日は恋人の許に帰っていくという前夜なので、夜更けて、月を見て歩いた。

早い時間だと、月見の客が車でうるさいだろうと、すっかり月が^{ちゆうてん}③中天に上りきってから、九時すぎて出かけたのに、嵯峨の道という道は、車と人で埋まっていたのには^{おどろ}愕かされた。

④^{だいかくじ}大覚寺の^{おおさわのいけ}大沢池では、毎年月見の^{えん}宴を開いて、^{りゆうとうげきしゆ}竜頭鷓首の船を浮べ、王朝のように^{かんげん}管弦を^{そう}奏して名月を愉しむのだが、新聞を見ると、^{まつよい}⑤待宵の月見は大覚寺では五千人のひとで、名月の夜は七千人の人があふれたという。私も一昨年だったか、大覚寺へ出かけて^{いも}⑦芋を洗うような混雑に^{おそ}怖れをなして逃げ出した。

日本人は風流だなあとつくづく思う。花が咲いたといえ^ば⑧^{あらしやま}嵐山に五万人の人が出、紅葉が色づいたといつては^{たかお}⑨高雄が人で埋まってしまう。花も紅葉も人間に圧倒されて、息も出来ないように見える。その人込みを見ると、本心から、花や月や紅葉を^{うたが}観賞したいのだろうか^かと疑わしくなる。

車が^ま⑩ひっきりなしに明るいヘッドライトを光らせて通る^{よみち}夜道の端を、^{ちようちん}⑪きゃしゃな月見提灯の^{とほ}乏しい火を^か⑫かばいなが

ら、徒歩の月見客が歩いている。

もうすっかり人の気配もなくなった大覚寺の門前を通りすぎ、広沢池のほとりへ出ると、ここにはまだ、月見の人があちこちにたたずんでいた。あんまり着馴れていない和服をきゅうくつそうに着て、赤ん坊を夫に抱かせた若い人妻が、丸い頬に月の光を受けながら、^③一心に空を見あげているのが^④ほほ笑ましく美しい眺めだった。月が上りすぎ、池には映っていないが、池の面は月光にきらめき、遍照寺山がくっきりと影を落している。もうボートの客は帰ってしまっていて、池は月光だけが渡っているのが^⑤森閑として、やはり嵯峨の月夜だと思う。

嵐山に廻ると、ここにもまだ月見の客が残っていた。

渡月橋の真中に立つと、丁度、月は川下の森の上に輝き、川波がきらきら光る。川面の葦も、堤もくっきりと浮び上っている。月光をとかした水が、水の中で最も美しいものだろうと、あらためて川面に眺めている。

ここは^⑥アベックが多い。あんまり若くない、三十歳前後のふたりづれが目立つ。こんな遅い時間に名月を眺めに嵐山まで来て、人の去るのを待つ風流心は、その年ごろの人に一番多いのかと思う。

月を見てしゃべる人はあまりいない。花見の客が酔っていたり、高笑いしたり、はしゃいで^⑦喋りちらすのと対照的で、まことに静かである。

こんな名月は見たことがないと、つれの少女がいう。彼女の恋の前途は決して樂觀を許さないのだけれど、若さがどんな苦境も克服していけよう、私は^⑧あえて彼女の出発を引き